

収不良症候群における以上の3点の診断に有効であることは、治療法にも関係して有用である。放射性B₁₂吸収試験は、主に⁵⁷Co-B₁₂によりシリング法で容易に行なわれるが、葉酸は³H-葉酸により同様の尿中排泄率測定で行ないえるが、³H測定という問題があるため、操作、容易などの点から容易とはいえない。これらの点について、これらの方のもつ特徴を症例について解説した。

*

21. ¹³¹IMAAによるじん肺症の肺シンチグラムについて

桜井 孝 中西 敬

(山口大学 放射線医学)

倉富 満

(山口労災病院 内科)

最近、¹³¹IMAAが各種肺疾患の質的診断、とくに局所的血流障害の診断に用いられてきた。

私どもは、以前よりじん肺症のX線像、病理所見、肺機能等について検索を行なっているが、引続いて今回、遊離珪酸粉塵の持続的吸入により、細血管ならびに細気管支周囲に線維性病変を起こし、その結果、換気障害ならびに拡散障害を惹起するじん肺症患者10例に¹³¹IMAAを投与し、その肺シンチグラムを検討した。

〔測定方法〕測定装置 東芝製 scintillation scanning devise, type ML 402A, 2''φ×2''l NaI crystal, collimator Tholes honey cone, rate down ratio 1/1, scanning speed 40cm/min. 被検者にあらかじめルゴール液を投与して甲状腺の沃度攝取をブロックし、¹³¹IMAA 150μCiを仰臥位で静注し、測定した。

〔結果ならびに考察〕X線像における粒状陰影の散布の状態によるシンチグラムの打点の程度については、scintillation counterの解像力の改善ならびに肺血流量比との比較と相俟って、今後なお症例を重ねて検討をする問題であるとしても、肺のう胞、いわゆる Bulla, Bleb、けい症性肺膜肺、塊状巣、融合巣のある場合には、多くの場合、打点の減少もしくは欠損像として、肺シンチグラムに認められた。

*

22. ¹³¹I-MAAによるスキャニングよりみた家兎胃壁内血流量と LDH アイソザイムとの関係について

浅野健夫 兵頭浩二郎

高橋利雄 宇都宮俊裕

(岡山大学 平木内科)

臨床的に胃潰瘍あるいは胃癌の発生頻度が幽門腺領域、とくにその小弯側に多いことはよく知られているが、その理由については一定した見解はえられない。われわれは胃粘膜の乳酸脱水素酵素(LDH)およびそのアイソザイムを検索し、胃粘膜の部位による代謝相の違いも関与する成績をえた。すなわち、小弯側はM型LDHが多いのに対し、大弯側はH型LDHが多くて、糖代謝のパターンを異にすることが認められた。この酵素化学的な相違が、血流量の差によるものか否かをみるために、家兎に¹³¹I-MAAを注射し、取出した胃についてscintiscanningと、胃粘膜における¹³¹Iの分布を測定した。

胃のscintigramでは幽門腺領域と胃底腺領域では明らかな相違があり、前者は後者に比し血流量がきわめて少ないことを示した。また胃粘膜のホモジネートをwell typeのscintillation counterにかけると、¹³¹Iの分布は幽門部より胃角部に少なく、胃底腺領域の大弯側ではきわめて多くて、scintigramの成績とよく一致した。

*

23. RIによる肝疾患時の肝循環動態に関する研究

—とくに体位変換に伴なう変動について—

中川昌壯 木下 陽

(岡山大学 小坂内科)

主として肝疾患患者約500例について、¹⁹⁸Au-colloidによる肝循環動態の検討を行ない、ことに肝硬変において明らかな循環障害を認めた。次いで臥位より腰掛坐位への体位変換によるK_Lの変化率は対照、慢性肝炎に比し明らかな増加の傾向を認めた。さらに詳細に検討すると腹腔鏡学的および組織学的に肝傷害の進展が進むにつれK_L変化率が増加していることは注目される。肝硬変におけるK_L変化率増加の機序解明のためK_L変化率と肝動脈血流比および心係数との関係をみたが有意な相関は認められず、さらに経動脈性血流量を比較すると対照では、減少するが慢性肝炎、肝硬変では不变であり経門脈性血流量は、対照、慢性肝炎では、有意な減少をみると